

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 29 年 6 月 22 日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370079

研究課題名(和文)懐疑的近代：プリアラリズム・科学化と原初的正義

研究課題名(英文)Skeptical modernity: pluralism, scientification and original justice

研究代表者

長尾 伸一 (Nagao, Shinichi)

名古屋大学・経済学研究科・教授

研究者番号：30207980

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は近年のコンテクスト主義的な科学史、18世紀思想史の研究動向と、申請者が行ってきたイギリス・ニュートン主義研究を総合し、ヨーロッパ近代思想史をプリアラリズムと科学化という、二つの新しい観点から再検討することを目的とする。この立場から16世紀末胎動期の懐疑主義、経験主義から、17世紀の科学思想、18世紀での人間と社会の科学の成立への道筋を辿ることで、「啓蒙」の社会観と社会科学の射程を、その限界と、原初的正義という工業化以後への展望という、現代に託された正負の遺産の両面から明らかにした。

研究成果の概要(英文)：Based on contextual studies of the history of science and 18th century intellectual history, and systemising the results of previous study of British Newtonianism funded by JSPS, this project investigated modern European thoughts from two viewpoints, pluralism and scientification of knowledge. Skepticism in the 16th century, scientific thoughts in the 17th century, emergence of the science of man and society in the 18th century were observed from the perspective. The social visions of the Enlightenment and the prospects of social science and their limitation were explained.

研究分野：社会思想史

キーワード：社会思想史 科学史 啓蒙 ニュートン主義

## 1. 研究開始当初の背景

古典的な啓蒙研究 (E・カッシーラー『啓蒙の哲学』、P・ゲイ『自由の科学』など)は、ニュートン主義に代表される科学革命の成果が、18世紀啓蒙期の近代的政治・社会思想を準備したと主張した。これに対して1960年代から現在までの新しい科学史研究は、科学の社会的文脈性や「科学革命」概念の不備を明らかにし (S・シェイピン『科学革命とはなんだったのか』など)、国際18世紀学会に集約される70年代以後の新しい啓蒙研究は、多様で未完の可能性に満ちた18世紀像を構築する可能性を提示した (『啓蒙の運命』名古屋大学出版会、2011年など)。また21世紀初頭から始まった日本と韓国の18世紀学会の共同研究は、ヨーロッパと東アジアの思想・文化が同時代的にとらえられることを示してきた。本研究は以上の動向及び、申請者をはじめとした、カントの陰に埋もれた18世紀ブリテンの代表的哲学者であるリードの緻密な研究、申請者のニュートン主義研究を踏まえて構想した。

## 2. 研究の目的

本研究は近年のコンテクスト主義的な科学史、18世紀思想史の研究動向と、申請者が行ってきたイギリス・ニュートン主義研究を総合し、ヨーロッパ近代思想史をプリューラリズムと科学化という、二つの新しい観点から再検討することを目的とする。この立場から16世紀末胎動期の懐疑主義、経験主義から、17世紀の科学思想、18世紀での人間と社会の科学の成立への道筋を辿ることで、「啓蒙」の社会観と社会科学の射程を、その限界と、原初的正義という工業化以後への展望という、現代に託された正負の遺産の両面から明らかにする。それは同時に、プリューラリズムと懐疑主義という、西洋近代思想と非西洋的な文化的・思想的伝統の通底部分を示しつつ、知の科学化という、西洋近代思想がモダニティの原型を提供する固有の要因を合わせて明示するものである。

## 3. 研究の方法

本研究は近代科学史と近代思想史・社会科学史を総合する学際研究であり、諸分野の研究成果を領域横断的に総合しながら進めた。また同時代の東西比較も視野に入れた。そのため国際的な専門家との対話、交流を重視した。また本研究は英語圏での電子データ・ベースによる文献の全文検索を利用し、主要な思想家・科学者の著書の分析にとどまらず、初期近代思想と科学、人間と社会の科学についての言説空間の全体像の復元を試みた。この目的で本研究は研究書の精査、刊本資料の読解と並び、国内外の電子データ・ベースの徹底活用を重視する。現地調査では、通俗的

著作家たちの未だ注目されていない刊本や科学者たちの書簡の分析、マニユスクリプトの形態をとる未公開資料の発掘を行った。また文献実証にとどまらず理論的なアプローチも併用し、科学哲学、科学社会学、言語理論、認知心理学、社会理論などの積極的な援用を行った。

## 4. 研究成果

本研究では以下の6点が明らかになった。

### (1) 懐疑論とプリューラリズム

ルネサンスから新しい科学を経て啓蒙へと続く初期近代思想の成立過程で、古代懐疑論の復活が重要な役割を果たしたことは、ポプキンの研究によって知られている。それと並び、原子論に伴って蘇った複数世界論も、コペルニクス、デカルト、ニュートンの宇宙観の中で、天文学的複数性論として再登場を果たすこととなった。古代ギリシア哲学に起源をもつ複数世界論は教父哲学やイスラーム哲学でも議論されてきたが、トマス・アクウィナスによっていったん否定されたのち、ニコラウス・クザヌスによって定式化され、ジョルダナーノ・ブルーノによってコペルニクス体系に接続されて、以後初期近代思想の一つの重要なコンテクストとして持続する。懐疑論とプリューラリズムはヨーロッパに限定されることなく、インドや中国の古代・中世思想にも見ることができると人類の共有遺産だが、それらはヨーロッパの初期近代思想史の展開の中で、知性の自由な、自己を相対化する運動を支え、自己言及性を担保する重要な機能を果たすこととなった。

### (2) 知の科学化

17世紀の「新しい科学」は、神学、形而上学や自然学に比べてアルティザン的な技能とみなされてきた数学や実験的技法を、理論的思考と結び付けることによって誕生した。それは魔術や錬金術と区別されながら、「自然という神の書物」を解釈する、科学的言語の創造をもたらした。科学の記号は、記号体系内でのレファレンスという点での「意味」を持つと同時に、対自然的な人間的行為を指示する点で、現実的な「意義」を有し、その点で記号体系として完結していた。人間の対自然行為と関連付けられた科学の言語は、「近代的」な意味での「現実」の定義を与えることができた。またそれは魔術や錬金術と絶縁するために自然言語との翻訳関係を否定していたが、ニュートンの科学的段階では科学の記号体系を物理的視覚イメージに「翻訳」することが可能だった。そのため科学的知識によって他の宗教的、人文的、形而上学的知識の領域を改革し、キリスト教分裂以後のヨーロッパの思想的危機に対処する、「知の科学化」の企てが可能になった。それはヨーロッパと非ヨーロッパの知的分岐点と考

えられる。

### (3) 科学化された眼差し

科学の言語によって生成される「現実」の地平では、人間はすぐれて社会的動物として現れ、宗教、権力、貨幣のような、人間の想像力が作り出す大文字の「主体」に基づく「文明」の装置が不可視になる。この「科学化された眼差し」は、知的世界の空間的拡大に基づく天文学的複数性論による宇宙からの視線、あるいは地理的拡大に基づく未開の眼差し、異文化からの眼差しとの同質の社会像をもたらした。この科学の言語が保証した「現実性」が人間の自然性ととらえられ、それを拠点として、個人の自然理性や欲求や社会的感情に基づいて文明全体の再構成を展望する18世紀の政治、社会改革論が可能になった。

### (4) 人間の起源と「人間と社会の科学」

科学の記号の意義を対自然行為から対人間行為へ変え、科学の方法によって「人間の自然」の記号体系を建設すれば、記号体系は対他者、対自己的行為を指示することになり、それらに関する普遍的妥当性を持つ命題が得られることになる。そこから科学の方法による「道徳哲学の刷新」という展望が開かれ、人間に関する科学的知が人間の道徳的進歩をもたらすという、「啓蒙のプロジェクト」が成り立った。こうして18世紀には、科学化された眼差しの地平に現れた自然的な社会の在り方を科学の方法によって理論化していくことで、普遍妥当的な倫理学と政策学を建設することが試みられ、「人間」と「社会」の科学が誕生した。だがこれらは1科学が進化という人間の真の起源を解明する以前に行われたこと2科学化された眼差しにとって、人間のコミュニケーション能力と想像力に基礎を置く文明の装置が不可視だったことから、巨大な社会の法則性の根拠を明らかにすることができず、1自然法則のような自然の秩序と2人間の自発性に基づく道徳的、社会的秩序の二分法と、1自然的な社会と2現実の社会という、規範と現実の分裂を生み出すこととなった。

### (5) 文明の災厄の縮減

18世紀の人間と社会の科学は、社会の法則性を明らかにできなかったが、個人の生活圏の視線に根差し、禍々しい文明の在り方を縮減する規範的な理論を提起し、文明内の生活世界に残る原初的正義の感覚を指示して、以後の民主主義や社会主義のような社会改革への方向性を示すことともなった。またそれは工業化以後の社会を展望する視野を持っていた。

### (6) 進化と文明の装置

啓蒙の社会理論に対して19世紀にはヘーゲル派の批判が対置され、進化論が登場した。

それらは明示的にはならなかったが、18世紀の「人間と社会の科学」が看過した「文明」の装置の可視化の可能性を秘めていた。だが20世紀後半の進化の理論の科学的確立と、ブリューナリズムの再生以前だったため、十分な展開をみなかった。

### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 2 件)

1. 長尾伸一、「18世紀における天文学的複数性論の普及 - 天文学者とサイエンス・ライター」、『経済科学』、62巻第1号、2014、pp.1-18(査読なし)
2. 長尾伸一、「初期近代ヨーロッパにおける複数世界論の展開」、『経済科学』、61巻4号、2014、pp.1-21(査読なし)

[学会発表](計 2 件)

1. 長尾伸一、コーディネーター・趣旨説明、大会共通論題「18世紀 持続と切断」、『日本18世紀学会第38回全国大会、愛知県立大学、2016年6月19日
2. 長尾伸一、招待講演、「複数世界論の論理と諸相 - ヨーロッパ近代の展開を中心に」、『19世紀学会学術講演会、新潟大学、2016年1月29日

[図書](計 2 件)

1. 長尾伸一、坂本達哉、編著『徳・商業・文明社会』京都大学学術出版会、420ページ、2015年3月
2. 長尾伸一、『複数世界の思想史』名古屋大学出版会、368ページ、2015年2月

[産業財産権]

出願状況(計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

6．研究組織

(1)研究代表者

長尾伸一 (Shinichi NAGAO)  
名古屋大学大学院経済学研究科・教授  
研究者番号：30207980